

森鷗外「最後の一句」の教材価値と実践試論

篠原武志

1 はじめに

森鷗外「最後の一句」は中学教材として教育出版『伝え合う言葉 中学国語3』に所載されている読書教材である。光村図書他は同様の教材として「高瀬舟」を載せている。私見では、この小説を中学教材とするときの難しさは最後の部分にあると思われる。「元始的な機関が自然に活動して、いちの願意は期せずして貫徹した」「江戸へ伺い中日延べ」「京都において大嘗会ご執行相成り候てより日限も相立たざる儀につき、太郎兵衛こと死罪ご赦免仰せいだされ、大阪北、南組、天満の三口お構いの上追放」という文語文を使用した言い回しがわかりにくい上、大嘗会と赦免についてどう扱うか教師の判断が作用するという難しさだろう。

本校は中高一貫男子校・カトリックミッションスクールである。

森鷗外「最後の一句」の教材価値と実践試論

二〇一六年度末、中学二年生に「最後の一句」の授業をした。中学二年生段階で、授業でそれなりに重厚な文学教材を扱っておきたかったことが理由のひとつである。また、「高瀬舟」では喜助の直接話法による語り、庄兵衛の内心を語り手が示したもの、語り手自身の批評を分けて考える必要があり、これが中学二年生には難しいであろうと考え、先の諸点を考えても「最後の一句」の方が妥当と考えたのがもう一つの理由である。

以下、私なりの「最後の一句」の教材論を示すと共に、授業実践のポイントについて提示しておきたい。なお、作品本文の引用はすべて『伝え合う言葉 中学国語3』による。

2 先行研究と問題点の所在

教材としての「最後の一句」については、熊谷孝氏が「わたしと

しては、『最後の一句』というこの鷗外作品教材化の最下限を、中学校後期というふうに考えている。一般的に言えば、高校段階の文学教育教材として考えたいのである^①として、この作品の教材としての難しさを指摘した。

また、牛山恵氏^②はこの作品がいちを英雄的人物として扱う徳目主義的なものなることを問題とし、この作品は、描かれた出来事が「わずか二日間のこと」であることで「いちが覚悟を決めるまでの時間の余裕がなく、いかに切迫した状況に追い込まれていた」か、さらにはいったん「覚悟が決まったいちが、いかに迅速に、着実に考えを実行に移していったか」を生徒に対して物語るものであるとする。

こうした時間構造に注目させることで牛山氏は「いちの行動はいちが自分たちとは違う特別な力を備えもっていたためにできたのだ」という、いちを英雄視する見方に疑問が生じた」としている。そのことよって生徒が「いちに勇氣や愛という言葉は使えないというように感じ始め」て、「最後の一句の意味を追求する出発点に立てた」としている。

牛山氏の指摘は、藤本千寿子氏の次のような指摘と重なる。

いちはこのような事情を襖のかけで立聞きした。死刑相当の真犯人は新七である。父は逃げた新七の代りに、大阪の海運業者

への見せしめのために殺されようとしているのだ、ということ
を明視したから立ち上がったのである。恩愛の上で父だからでは
なく、これが冤罪だから、それを告発することこそ、いちの
出願動機であった^③。

いちが、英雄的と言うより論理的思考の中で立ったというべきであろう。

語り手論については高野光男氏^④が次のように示している。

「最後の一句」を注意深く読めば、語り手はいちが考えたことを会話文で示したり、行動や様子を外側からつぶさに語ったりすることはあっても、その心理、内面を説明することはない。

(略)ところが、奉行の佐佐と語り手との関係は、いちと語り手の関係とは大きく異なっている。語り手のベクトルの相違である。(略)「思っていた」「感じた」「思われるほどである」「念がふと萌した」「思議した」「考えた」「考えた」というように述語部分はすべて佐佐の内面を示す動詞で終わっている。これが語り手と佐佐の関係であり、語り手のベクトルはいちの行動によつて佐佐に生起した心証の解析に向かっているのである。

そして、「最後の一句」を発する場面についても次のように言われる。

語り手が『何か心に浮かんだらしく』としか語っていないため

に（語りの仕組み上、語ることができないうために）多様な解釈が生まれてしまうのだ。（略）佐佐の目に映ったいちはずで「哀れな孝行娘」でも「人に教唆せられた、おろかな子ども」でもなかった。しかし、佐佐も城代も「罪人太郎兵衛の娘に現れた作用」の正体、いちの他者性を見極めることはできなかった。激しい衝撃を受けたものの、その正体を理解することはできなかったのである。結局、いちの行為は「変な小娘だ」「ものでも憑いているのではないか」といった前近代的な共同体の枠組みのなかに封印され、「内なる他者」とされることによつて権力機構の安定がはかられる。

高野氏の論は、多くの点について肯ける論である。しかし、「マルチリウム」という洋語の使用が「語り手の属する近代という時間」だけを表しているとは思えないし、最後に語られる大嘗会と恩赦を語り手がこの物語に対してどう位置づけようとしているのかも教室で読まれるべきことだろう。また、「元始的な機関」とされる「元始的」という文字にも「原始的」以外に、高野氏の前近代的とされる意味以外に、読者は意味を（例えそれが、作者鷗外が意図したものでなくても）読み取るのではないだろうか。なおこれらのことについては、授業実践論の中で明らかにしていく。

3 授業の概要といちの様相を示す語り手

授業は次のように進化した。

- 一時間目 教師範読の後、おおまかな語句の説明。
- 二時間目 教師の設問に従って、初読のレポート。
- 三時間目 第一の場面の読解。
- 四時間目 第二の場面から第三の場面冒頭の読解。
- 五時間目 第三の場面の読解。
- 六時間目 第四の場面の読解。
- 七時間目 第五の場面の読解。
- 八時間目 第六の場面の読解。
- 九時間目 授業後のレポート。
- 十時間目 交流。

一時間目の範読の後、二時間目に次の三つの問いを出題して最初のレポートを書かせた。

- 1 この小説でいちほどのような人物として描かれているか。書いてあること、書かれておらず推定できることを含めて答えよ。
- 2 この小説で佐々ほどのような人物として描かれているか。書いてあること、書かれておらず推定できることを含めて答えよ。
- 3 この小説でいちの「お上のことにはまちがいはございませんまい

から」という言葉はどのような意味で用いられているか。また、どのような効果を上げているか。書いていること、書かれておらず推定できることを含めて答えよ。

生徒たちは、初読の段階でいちをどのような少女として捉えたのであろうか。

① いちは長女としての責任感を強く持ち、親を何よりも大切に
する人物として描かれている。もともと正直な人であった
父太郎兵衛を救うためには、自分たち娘が何かしてやれない
かを考えているからだ。また、自分が成し遂げると決めたこ
とは決して曲げない芯の強い人で、跡継ぎの長太郎を殺さな
いよう願っているのも一家の後のことを考えているからと思
う。

② 元々いちは母親方の祖母に甘えていたような人物であった
が、ある日、父太郎兵衛が死刑になるという祖母の話を立ち
聞きし、自分たち子供を殺す代わりに父太郎兵衛の命を救う
ことを考えついた。自らの考えに、他の子供たちをなかなば強
引に引き込んだことから、多少身勝手な人物だとも考えられ
る。また、助命の願い書の内容が奉行である佐佐から見ても
しっかりしたものであったことなどから思考も速いことがう
かがえる。

③ いちは父が殺されること、そしてこの一連の出来事によつて母が不機嫌になったりしたこと、それによって兄弟が苦勞を
していることを見て自分たちが死ぬことによつてこれらの苦
勞をもたらした父の処刑を食い止めようとする家族思いの娘。
このために強情な娘というように見えてしまった。

(以下、Tは教師、Sは生徒。)

T …「第一段落は語り手が高札が立った日の出来事について語っている。この語り手ってわかる？」

S 1 …「作者とは違う？」

T …「ややこしいかもしれんけど、作者とは区別して考えよう。

作者は実際の森鷗外、そこには実際の履歴とかが関係する。語り手はそれとは違う抽象的なもの」

S 2 …「なるほど、架空の存在と考えればいい？」

T …「そういうことやな、時代とか越えて存在するのが語り手ね。ところで、第一の場面で『おばあ様を慕って、おばあ様に甘え、おばあ様にねだる孫が、桂屋に五人いる』というところで、その語り手が『おばあ様』と三回繰り返しているんだけど何でやと思う？」

S 3 …「②がいうようにそれだけ、いちをはじめとする子供達
が甘えていたってことを強調したい？」

T …「そうね。ってことは③でいうような『家族思いの娘』にどうしてなったのかな？」

S 4 …「もともとではなかったっていうこと？」

T …「そうね。もともとは？ 太郎兵衛入牢後の子供達の様子を他に第一の場面から抜き出してみて」

S 5 …「しかしこれから生きていく子どもの元気は盛んなもので、ただおばあ様のお土産が乏しくなったばかりでなく、お母様の不機嫌になったのにも、ほどなく慣れて、格別しおれた様子もなく、あい変わらず小さな争闘と小さい和睦との刻々に交代する、にぎやかな生活を続けている」

T …「そこね、父の入牢はいち達子供達に影響を与えた？」

S 6 …「あたえてない、父が入牢しても子供達は子どもらしい生活を送り続けた」

S 7 …「じゃあ、なんでいちは変わったん？」

T …「そこね、次の時間に考えてみよう」

このようにして、冒頭の場面でのいちはじめとする子供達の様子に注目することによって、いちという少女が最初から特別な少女として描かれていないことが、生徒たちに判明していき、では変貌の理由とは何か疑問としてたれてくるのである。

4 変貌の理由としての冤罪

T …「いちはなんで変わったかを考えるけど、第二の場面は、時間が前にもどる。太郎兵衛の入牢の理由を説明するんやな。これは語り手がそうしてるんやけど、なんで語り手はそうしてるかわかる？」

S 1 …「わからへん」

T …「まあ、そういわんと。第一の場面の最後はどういうところまで終わってたっけ」

S 2 …「高札の立った日に、おばあ様が来て、太郎兵衛の女房にそのことを言い、女房が練り言を言う場面」

T …「じゃあ、次は第三の場面はどういうところから始まっている？」

S 3 …「おばあ様が恐ろしい話をするのをいちが立ち聞きして、身代わりを願い出ることを思い立つ場面」

T …「その第三の場面の冒頭で女房はどうなっている？」

S 4 …「いつも練り言を言って泣いたあとで出る疲れが出てぐっすり寝入った」

T …「そう、じゃあ、第二の場面を改めて読んだとき、君らは一番悪いのは誰やと思う？」

S 5 : 「新七？」

T : 「そう、じゃあ太郎兵衛は？」

S 6 : 「死罪に当たらない？ 冤罪？」

T : 「冤罪とまで、いえるかわからんけど、最大の犯人、新七が逃げたために犯人として殺されることになったとはいえそうやな」

S 7 : 「先生、これももしかして繰り言の中身？ 女房は太郎兵衛が殺されるべきではないのに、って嘆いていて、それをいちが聞いたってこと？」

T : 「そういうことになる。いちが死罪になるべきでない父のために身代わりを決意した。そこにいちの変貌の理由はあつたわけや」

第二の場面が、第一の場面と第三の場面の繰り言に挟まれていることに気づかせてやると、生徒の方から、第二の場面とは実は女房の繰り言を語り手が、時系列の順序を組み換えて語つたものであることが分かる。そうすると、いちの行動の変貌の理由が生徒に飲み込めてくるのである。

5 いちと佐佐

第三の場面ではいちが願いごとを書くのに一番鶏の鳴く頃までか

かっていることに注目させた。当時、庶民は日没後まもなく寝る風習だったはずであるから、いちが少なくとも見積もつて八時間ぐらいかかって、願い書を書いた事に注目させた。いちが、天才とか大人と同様の才覚の持ち主ではなく、努力で「条理がよく整つ」た文章を書いたのである。それも、本当は罪に問われるべきでない父を助けたいと思う心からであった。

さて、第四の場面が登場する西町奉行、佐佐はどのような人物として、読者に捉えられたのであろうか。最初のレポートで生徒は次のように書いていた。

④ 両奉行のうちの new 参で役向きのことは全て同役の稲垣に相談したり、桂屋太郎兵衛の公事が片付いたときに命乞いに出たものがあると聞いて邪魔が入つたように感じたりするなど、多少面倒くさがりな所のある人物。また、いちたちのことを子供扱いしている。

⑤ 物語の初めの方での佐佐は、明らかに仕事にやる気が無かつたように見える。仕事のことでも全て仕事仲間や上司に相談するもその通り処理するだけの典型的な事なかれ主義である。「じゃあお前は『死ぬ』と言われたら『死ぬのか』と問いたくなる人物だ。いちたちに対しても初めは調子を狂わせる「厄介者」としか思っていないようだ。しかし、いちの最後の一

句で、彼も仕事への姿勢が変わるのではないか。

⑥ 佐佐は子供をおどそうとしたり、処刑の手続きが済んだのに命乞いの願いに出たものがあることに不機嫌になったことから高圧的な人でもある。また、不自然なまでに簡潔にまとめられている短文を大人が書かせたものではないかと子供を軽く見るところがある。

これらをもとに、第四の場面の佐佐の様子を議論した。

T …「佐佐って、最初に登場してきたときに、『桂屋の公事について』『ようよう処刑の手続きが済んだのを重荷を下ろしたように思っていた』のに、いち達が命乞いに出てきたから、『せっかく運ばせたことに邪魔が入ったように感じた』んやな。これって④の意見にあるように『面倒くさがり』なのかな？」

S1 …「僕はお上の決めたことに文句をつけるから面倒くさいのかなと思っただけだ」

T …「S1、もうちょっと詳しく言ってみて」

S1 …「だから、面倒くさいのはそうなんやろうけど、佐佐もお上が決めたことに従って役人として決めた。その決めたことを覆されるように『邪魔が入った』と感じたんちゃうかな？」

T …「そうね。みんな、今、S1が言ってくれたことわかったかな。つまり、佐佐も普通の人間なのね。けど、お上の権力側の

人なのね。だから、お上の決めたことに従って動くし、それはそれで頑張ってるわけよ。でも、それを無にされたら腹が立つわけやな」

S2 …「悪い人じゃない？」

T …「悪くないともいえない、ただ権力に従ってしまふのよ」

S3 …「盲目？」

T …「そういうことになる」

S4 …「先生、佐佐がいち達の行動を『上を偽る横着者の所為』って考えるのもそこの？」

T …「そうね。中一のと看、『少年の日の思い出』ってやったやろう」

S5 …「『そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな』ってやつね」

T …「よく覚えてる。その会話文でもそうなんだけど、大事なチヨウを壊されたエーミールは『僕』を悪漢と決めつけたよね」

S6 …「そうか、佐佐にとっては『上』が大事なもので、その決定に、命乞いをするいちたちは悪なんや」

T …「まあ、正確に言えば、大事というより、幕臣で、生まれたときから、従うべきものなんやろけどね」

S7 …「⑤の『仕事のことも全て仕事仲間や上司に相談もその通り

処理する』つてのもそれ？」

T …「まあ、そういえば、そう。⑤は『事なかれ主義』つていうけどさ、御奉行様だから、本当に『事なかれ』ならとりあげなければいいのよ。それを相談して取り上げて、白洲まで用意するのは何故？」

S8 …『上を偽る横着者の所為ではないかと思議』して『情偽』を探ろうとしたから」

T …「つまり、それだけ『上』というものを守ろうとしてるわけね。そして、『上を偽る横着者』を真面目にあぶり出そうとするからそうなるわけやね」

このようにして、他の教材を補助線に入れることによって、佐佐から見たいちたちの有り様がよりよく生徒たちに見えてくる。また、佐佐がいちと結果的に白洲で対峙していくのも何も佐佐が悪であるからではなく、真面目な一人の人間であるからだというのが生徒にも見えてくるのである。

6 最後の一句

第五の場面で登場するいちの最後の一句については、生徒はどのような感想を持ったのであろうか。

⑦ 佐佐が自分たちを殺さないのではないかと思っただい、

佐佐の「すぐに殺される」という発言に対して、「幕府の言っていることに間違いはない」と皮肉に言ったようにしている。それによって自分が落ち着いていることを示そうとしている。

⑧ この言葉にはお上に対する牽制の意味があると思う。この言葉がなかった場合、先にいち達が殺されるために、いちの父もその後に殺される可能性があるが、この言葉を言ったことにより、佐佐のプライドにかけてもいちを殺した場合いちの父を解放しなくてはならなくなる。よって脅しであったはずの言葉が自分が感情を高ぶらせ問答無用にいちやその家族を殺すことができなくなり、なにより不意打ちにあい、動揺した上に、プライドが邪魔をして、この一連の事件をなかつたことにすることになった。

いちの最後の一句の場面の発言の意図については、山崎一穎かずひで氏が次のようにされている。

咄嗟の間にいちが①身代りが聞き届けられる。(父が助けられる)②子供達の死。③父の顔を見ることが出来ない。という順序で考えてみる。命を捨てる決意は②③に対して恐怖も不満もない。しかし、いつに②③は①が成就しなければ無意味である。身代わりが聞き届けられて父が助けられるという確証が得られ

ない。

それ故に土壇場に於いて、いちの叡智は、ひよっとしたら子供達が殺され、父も助命されぬ事があるかも知れないという疑念が生じ、その危機感が身代わりが聞き届けられ、父が確実に助けられることの念押しが〈最後の一句〉となったと言える。^⑤

私もこの意見に賛成する、それ故、この考えを元に授業を行った。また、先行研究では、この場面のいちの心理を、「無条件の肯定に対する限定条件」とするもの、「反語」とするものなどがあるが教室の議論はどのようなものだっただろうか。

T …⑦は佐佐が自分たちを殺さない、つまり身代わりを聞き届けないから言ったということ、⑧は佐佐がいち達を殺した後、父も殺すということを恐れたから、ってこと。みんなはどうちっと思う？

S1…「わからへん」

T …「ここまで、一貫して佐佐は何を疑っている？」

S2…「いち達が『人に教唆せられた』のではないかってこと、『上を偽る横着者』によって願ひ書に『情偽』があるのではないかってこと」と

T …「じゃあ、いちはその疑いをわかっている？」

S3…「わかっている。その直前に佐佐がいちに『もし少しでも申し

たことにまちがいがあつて、人に教えられたり、相談したりしたのなら、今すぐに申せ』って言ってる」

T …「そこから考えたら、もし、『上を偽る横着者』がいたとしたら、いち達を殺さないのと、いち達を殺して太郎兵衛も殺すのとどっちが『横着者』に手痛い？」

S4…「両方殺す方？」

T …「そうやるね。太郎兵衛だけ殺すのは最初からなんやし、『横着者』にとつて大した痛手ではない。むしろ、両方殺されたとしたら、『横着者』——例えば、おばあ様とか——にとつて痛手やる」

S5…「先生、じゃあこれは、⑦⑧とも言っているように皮肉なの？」

T …「そうとも限らん。むしろ、そうではない可能性が高いと思う。S6、その前の会話文から読んで」

S6…「『よろしゅうございます』と、同じような冷やかな調子で答えたが、少し間をおいて、何か心に浮かんだらしく、『お上のことにまちがいはございますまいから』」

T …「この冷やかさつてその前の『申したことにまちがいはございません』って発言するときの冷やかさやから、自分への自信なんやけど、その後でふと思いつくわけや」

S7・「いちには素朴に口にした、でも、それが佐佐達にとつては皮肉といえる内容だった」

T …「そう考えた方がわかりやすいと思う」

7 元始的な機関が自然に活動して

ところが第六の場面での結末は言葉と共に生徒にわかりにくい。いちには法廷劇で勝利したのではなく、それと直接関係ない「元始的な機関」の活動によるものであった事を説明した。最終感想は、第六の場面の簡単な語釈と、「元始」について、「原始」と同じとする『広辞苑』に対し、『大辞林』では「物事のはじめ。おこり。また、年のはじめ」となっていることを紹介した。また、授業中でも触れたが佐佐の心情が断定的であるのに対して、いちの心情が常に「ようだ」という表現になっていることに注意を促した。また、「マルチリウム」という言葉は本来、殉教の意であるのに語り手は「献身」を訳語としていることにも注意を促した。最終感想は次のようなものであった。

⑩ 僕は、この小説において語り手は、「マルチリウム」、つまり一個人が自らの信念などに対して、自らの最大のモノである命を使うという行動は、徳川家の役人つまり、権力を持っている機構の機械的な処理を担っている部分を動かすことは

できないということを言いたいのではないかと思う。根拠となる箇所はいくつかある。

一箇所目は、「しかし、献身のうちに潜む反抗の矛先は、いちと言葉を交えた佐佐のみではなく、書院にいた役人一同の胸をも刺した」というところである。僕はここをいちの「献身」つまり「マルチリウム」に含まれる「反抗の矛先」であるいちの最後の一句は、佐佐と「書院にいた役人一同」つまり権力者の「胸を刺した」つまり心を動かしたのだと解釈した。

二箇所目は「当時の行政司法の元始的な機関が自然に活動していちの願意は期せずして貫徹した」というところである。僕はこの部分を「当時の行政司法の元始的な機関」つまり権力を持っている機構の機械的な処理を担っている部分が「自然に活動した」、つまり誰からも何からも影響を受けずあくまで機械的に処理して「いちの願意は期せずして貫徹した」つまり、いちの意図や行動とはあまり関係なしにいちの願意は達成されたという風に解釈した。但し、いちの願ひ書によつて「江戸へ伺い中日延べ」となった事がなければ、太郎兵衛はまず間違いなく死罪のままであつただろうと思われるので全く無駄という訳ではないと思う。

よって僕は、語り手は個人が動かすことができるのは個人の行動や心までであり、権力やそれを持っている機構の行動などを動かすことは非常に難しいということを言おうとしているのではないかと思う。

⑪ この小説では、最後までいちの感情というものは一度も書かれなかったが、これは読者のいちへの感情移入を防ぐためだと自分は考えている。この小説はいちという孝行娘の献身をただつづただけのものではなく、この小説は登場人物に色眼鏡をつけず客観的に見て初めて本質を理解できるものだと思う。話の中でいちの母の繰り言を聞き、父の罪の真実を知り、父の助命を決心した。ただ、自分はこのいちの決心はただ家族を救うという思いのみで生まれたものではないと思う。話の最後の方では語り手がいちの行動と「マルチリウム」という洋語をつなげる発言をする。マルチリウムとは殉教の意味で本来なら教えのために死ぬことをいう。これはつまりいちが父という「人物」だけでなく、本来不必要な罰を科された「父」という名の人物にふりかかる理不尽を正さなければならぬといういち自身の中にある「教え」のために身を捧げようとしたのではないか。そしていちはその「教え」に突き動かされるように行動したのではないか。しかし、

作中での取り調べの時、ふと奉行所に裏切られる可能性が頭に浮かんだ。もし仮にいちの今までの行動が全て計画通りだったのなら、裏切りの可能性にもっと早く気づき対策をしたらずである。おそらくいちの、今までの行動は自らの教えに動かされていたものではないだろうか。

さてこの小説にはもう一人の中心人物がいる。それが佐佐である。彼の感情は小説の中でかなり鮮明に書かれている。自分はこの論の最初でいちの感情が書かれていない理由として感情移入を防ぐため、といったが、恐らく逆に語り手は佐佐の方に感情移入してほしいのではないか。作中の佐佐は典型的な大人であり、「教え」のために自らを捧げるいちとは正反対の人物である。実際に、作中ではいちの行動が理解できていないようなところがあつた。では佐佐に感情移入して語り手は読み手に何を考えてほしいのか。おそらく私生活では忘れて自分の意志のため、他人のために何かをつくすという気持ちではないか。通常、人は自分の意志ではなく、自分の利益のため、または意志であっても正しい意志でないもののために行動しがちである。実際それが当たり前なのが、語り手はそれを否定しているのではないか。なので、いつも通り自分たちの象徴である佐佐と正しい意志の象徴であ

るいちを合わせ、対立させたのではないか。

生徒たちにとって、授業を通して、いちち父を助ける「マルチリウム」という思想を体現する人物として映っていく。そして、それは「元始的」とされる権力の機械的、機構的部分に包まれながらもそれと対局に認識されていく。さらに、生徒自身、自らは実は佐佐に近い生活を送っているのであり、いちの境地にはほど遠いということがわかる。

生徒たちの生きる現在の混迷する世界の中でも、結局存在し続ける権力と我々の関係とこの作品が地続きであろうということ、ここに気づかせることにこそ「最後の一句」の教材価値はあろう。

注

- ① 熊谷孝『文体づくりの国語教育——創造と変格への道——』三省堂、一九七〇年六月、二九八頁。
- ② 牛山恵「多義的な読みへの出発——『走れメロス』『最後の一句』を例に——」『教育科学国語教育』一九八六年七月。
- ③ 藤本千鶴子「『最後の一句』の意図——大逆事件との関連——」『近代文学試論』一九八三年十二月。
- ④ 高野光男「物語を越えて——語りから読む『最後の一句』——」『日文協国語教育』二〇〇九年一月。
- ⑤ 山崎一類「『最後の一句』論攷」『跡見学園女子大学国文学科報』一九九〇年三月。

- ⑥ 長谷川泉『森鷗外論考』明治書院、一九六二年一月、三七二頁。
- ⑦ 小泉浩一郎「森鷗外『最後の一句』論——その〈最後の一句〉をめぐり」『森鷗外研究』一九八七年五月。